

## 酷寒に耐えて

宮城県 三浦 一夫

私の家は村の素封家、三浦家より隣町に分家となった家でしたが小農家だったので生活は貧しかった。その上、戦時中の生めよ殖やせよの国策に沿っての、七人兄弟の長男として生を享けましたので義務教育を終了するのを待ちかねるようにして大農家に住み込みの年雇として奉公して生活の手助けをしていました。

そのころ軍需工場より徴用令がきて二人の弟と共に見も知らぬ東京大田区の工場に二年八カ月勤務しました。そして繰上げ徴兵検査の命令があつて勤務地において徴兵検査の結果、甲種合格となり、当時の男子としての本懐これに過るものなしの感慨でした。出征の日も近づいたので久し振りに帰宅したが毎日が入隊の準備に追われ、多忙の日々でした。

昭和二十（一九四五）年二月二日の入隊にあわせて、町では母校の校庭で、壮行会を盛大に開催して頂き、当日三人が参加したが、二人が一緒の部隊でした。町長さんをはじめ町の有力者の方々の祝辞や激励の挨拶があり興奮の中で覚悟のほどを披瀝しました。そして後顧の憂もなく、町の兵事係の引率の下に、住み慣れし故郷の鹿又駅より仙台に向け列車の人となったのです。

仙台の県庁集合だったので大勢の仲間が続々と集合しました。県知事より祝辞があり、仙台駅より列車にて東京駅で下車、世田谷の東部第七十二部隊に仮入隊しここで二等兵の肩章の軍服に着替へ、軍人としての重さを感じました。

四日ぐらいすると防寒用の衣服が支給されたので、これは寒い所に派遣されるのだなど、お互いに暗黙の中で頷き合いました。

入隊して間もない七日、東京駅より列車にて出発し、博多港に到着しました。夕食後、輸送船に乗船、魔の玄界灘も無事に航行して釜山港に上陸、

翌日、釜山を出発、鮮満国境を通過して十日に新京（長春）第三九六師団第一三二部隊遠藤教育隊の火砲技工として入隊しました。

各個教練を受けている時、内地より履いて行つた編上靴が寒さで曲らず、自由が効かなくなり防寒靴に取り替えられました。また教練のなかで速歩行進が非常に良好であるとのこと、同年兵の整列している前で緊張しながらの模範演技をしたあの日あの時のことが、今でも脳裡に焼き付いています。そしてそれからのことが自信となり、すっかり二等兵としての軍服姿が身についたころ、古年兵が全員転属になり、班長、曹長殿の当番兵を命ぜられました。

八月一日で一等兵に進級し、各個教練にもますます熱が入るのですが、大陸は特有の空も見えないような黄塵が飛び舞い、目も開けられない状態でした。このため各個教練中に倉庫より防塵眼鏡と食用アルコールを徴発してこいとこの命に有頂天になっているところで非常呼集が掛かりました。

慌てふためき外に出て整列した途端に服装検査となり、掛け忘れた各種の釦を「不用なのだろう」と全部もぎとられるやら大騒ぎでした。

その後班長より下士候志願を強要され、連絡があるまで待機せよの命があり、観念していました。また火砲技工の技術教育の後、試験として技術を競わせられたりしているうちに奉天（瀋陽）の軍需工場に転属となりました。工場内には米兵が百人ぐらいいいて三十連発自動小銃が完成しつつあるとか聞いていました。

間もなくラジオ放送があるので前庭に全員集合させられました。何事だろうと思つて聞きますと日本の無条件降伏の玉音放送を聞かされていたのです。当時のことが今でもまざまざと思ひ出されますが、当時はこれからのようになるだろうという尽きない心配が先にたっていました。

その後、部隊ごとに糧秣倉庫より持てるだけの食糧や砂糖、衣服を持ち出し、互いに交換したりしながら山の中に入りましたが一週間もするとた

ちまち食糧難に陥りました。どうしようもなく困っていたところ、ソ連の空軍機によりビラが撒かれ、早く山を降りてくる様にとの勧告でした。

下山すると、そこから貨車に乗せられ、北満の黒龍江を船で渡り、以後、三年三カ月の酷寒の地で労働に耐えさせられることとなったのです。

昭和二十三年二月一日、ソ連のナホトカ港を出港、やれやれようやく祖国の地、東舞鶴港に上陸しました。ここで各種検疫などがあり、以上なしということで川辺大隊第七八中隊第七班「永徳丸」第三六一五九一号の「引揚証明書」を支給されました。一つの物も分け合った四年間の軍隊生活、これは通常の時代では身に付けることの出来ない尊い体験でした。

復員列車で故郷に帰ると外地で想像し記憶にあった故郷の山河は、大陸を展望して来た目には山がつかえるように狭く見えやっばり大陸の広大さを改めて感じました。帰ってきた内地は爆撃や銃撃を受け、また予想もしていなかったよもやの敗

戦で人心の動揺が大きくこれは想像を絶するものがあつたと思いました。

しかし四年間の苛酷な生活の中でしか学べないものがありました。あの大陸の酷寒での作業や、食べる物もない中で、皆で分け合い助け合った協同精神の尊さも学びました。そしてやる気さえあれば、軍隊で培った精神力を活かし皆で力を合わせ祖国復興に励みました。

その結果、何不自由のない社会ができ、平穏な老後を送る事が出来る幸せを満喫しております。

あのような人の命を奪いあう戦争は、お互いに二度と体験させてはならないと、子孫に伝えるべきと、心に強く刻み込んでおります。